

令和6年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業
中間支援振り返りシート（2025.3）

活動団体の活動におけるテーマ

『共同堆肥舎を中心とした
市民参加による地域循環型農業促進事業』

活動団体の活動地域：沖縄県中部地区
活動団体名：中部地区和牛改良組合
中間支援主体名：国立大学法人琉球大学

活動計画（概要）

地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

農家と市民の行動変容によって、畜産廃棄物の適正処理を行い牧草地や農耕地へ還元するといったことが当たり前にできている地域

⇒ 堆肥の循環により、後世に誇れる持続可能な農業ができる地域にしたい

地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

- ・ 堆肥製造業者による堆肥化技術の導入
- ・ コントラクター事業の創出
- ・ 自治体・JAとの協力による市民農園の創出
- ・ 組合で活用できる共同堆肥舎の設立

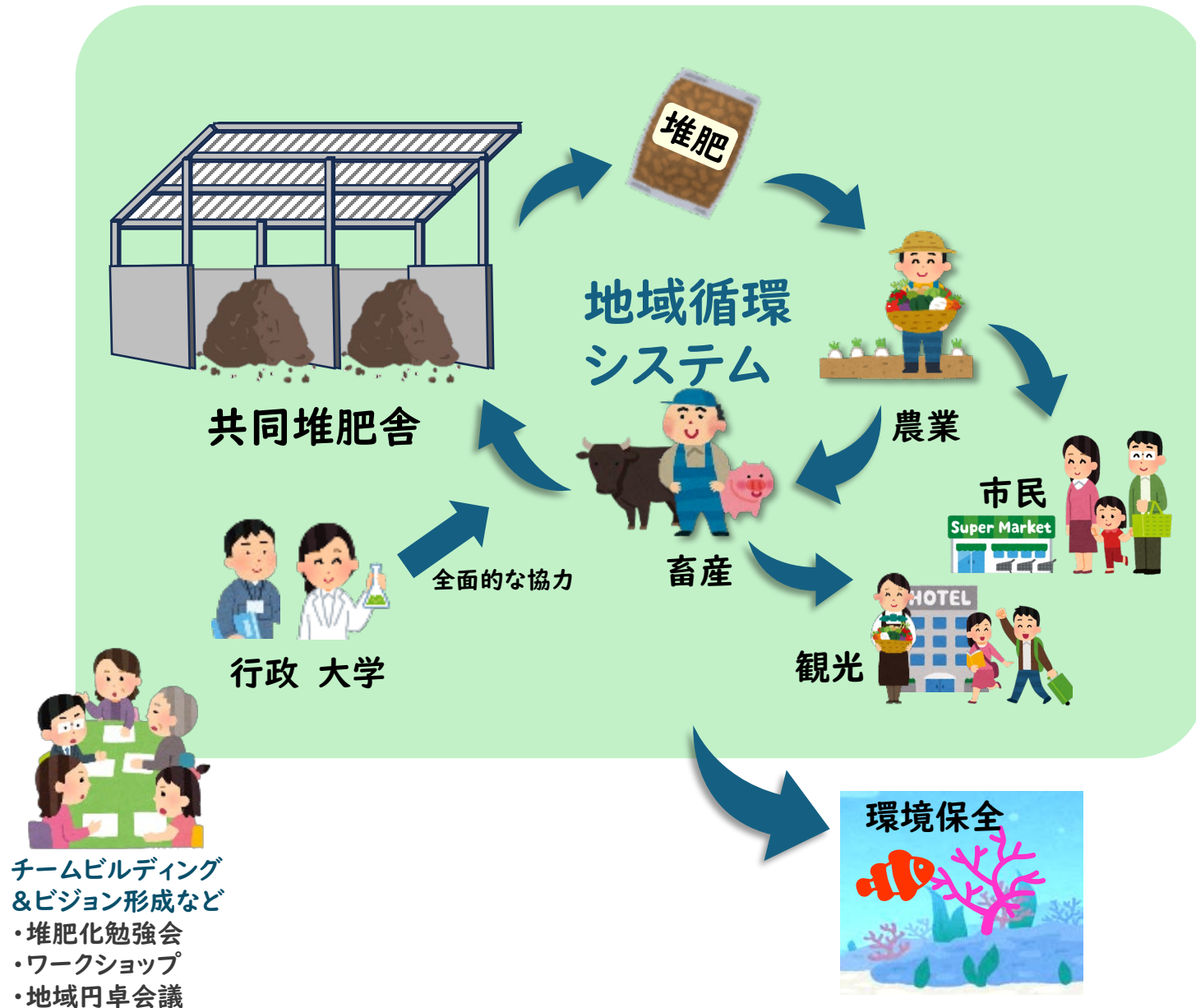
ローカルSDGs事業として取り組む内容

- ・ 効率的かつ品質の良い堆肥作り
- ・ 堆肥の普及
- ・ 沖縄県中部地区の畜産農家と耕種農家のマッチング
- ・ 中部地区和牛組合産堆肥を用いた農作物の地産地消活動

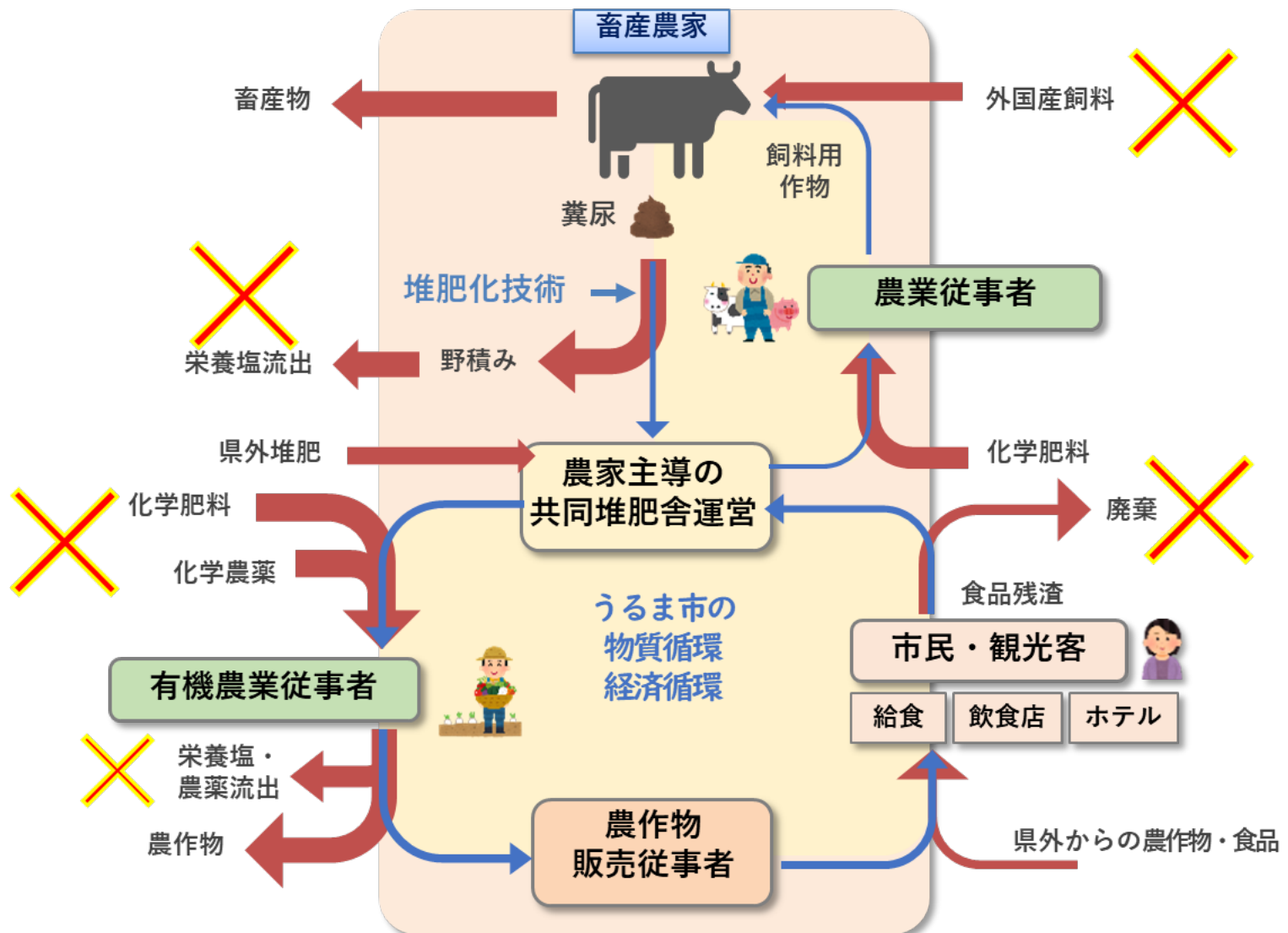
地域の現状

- ・ 畜産現場から出る悪臭
- ・ 畜産廃棄物の不適切な処理による環境への悪影響

活動計画（概要）



活動計画（概要）



2026年度末の状態目標

- ・事業を考える・生み出す

共同堆肥舎を中心とし、地域プラットフォームによる地域資源循環型農業を実現する。具体的には、共同堆肥舎にて作成された堆肥が、農家間ネットワークにより市民農園や耕種農家の農地へ還元され、そこで得られた農産物が、地域の学校給食やスーパー、レストラン、ホテルなどで利用されることを目標とする。

耕種農家向け堆肥活用の勉強会の実施

2025年度末の状態目標

- ・体制を整える，仲間を探す

ステークホルダー間での地域資源循環社会におけた実施体制の検討をし，連携を強化する

- ・事業を考える

畜産農家向け堆肥化勉強会の実施，有機農業に取り組む生産者の圃場を視察

- ・地域のビジョンを描く

循環型農業実現WSの開催

2024年度末の状態目標

- ・体制を整える

中部地区和牛組合内での連絡体制を作り，各イベントでの参加数を一定数確保する

- ・仲間を探す

うるま市循環型農業推進協議会を活用し，耕種農家との意見交換

- ・事業を考える

畜産農家向け堆肥化の勉強会の実施，各地の堆肥センターの視察

- ・地域のビジョンを描く

ビジョン形成WSの開催

共同堆肥舎を中心とした地域循環システム構築の計画

想定
スケジュール
2025年

共同堆肥舎事業の実施主体法人
(農事組合法人) を設立



行政の協力

2026年

第1段階: 共同堆肥舎設置・堆肥製造

2028年

第2段階: コントラクター事業(農畜産の作業サポート)の多角化推進

2030年

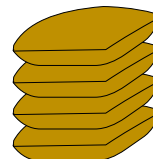
第3段階: うるま市内他地域への展開

市民のシビックプライド
(地域への誇り・愛着・貢献の思い)の醸成

共同堆肥舎イメージ



堆肥販売



圃場サポート



農産物
ブランド化



■見立て

- ・ 小規模農家が広範囲に点在している
- ・ 畜産廃棄物を誰が運び、堆肥を誰が作り、誰が撒くかが課題である
- ・ 堆肥を作成し、循環させる仕組みづくりがポイントである

■打ち手

- ・ 連絡網の構築
- ・ 堆肥化勉強会
- ・ ビジョン形成ワークショップの開催
- ・ 沖縄式地域円卓会議の開催（課題の深掘り）

■中間支援機能の強化・振り返り

【地域のビジョンを描く】

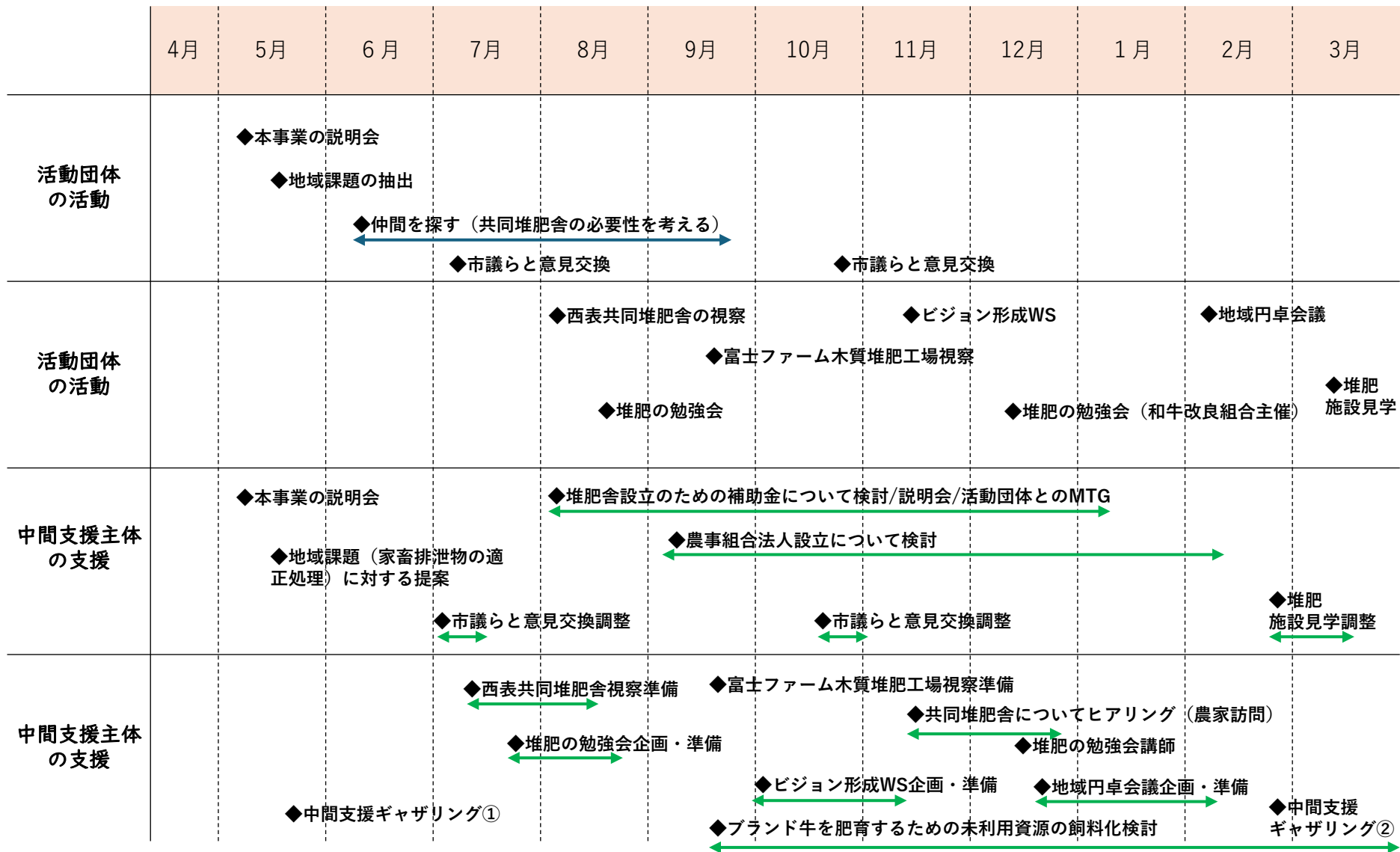
循環型農業を実現したいと思っており、「このままではいけない」「現状を変えたい」という熱い思いがある状態なので、ありがたい未来からバックキャストで、今何をするのか一緒に考えていきたい。

【体制を整える】

循環型農業の実現のために、何らかの体制を作りたいと思っはいるが、どのような体制をどのように構築したらいいのかわからない状態にあるので、支援しながらまずは内部の連絡体制を整備し、耕畜連携を図りたい。

活動・支援のプロセスの振り返り

■R6年度活動・支援内容



活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

仲間を探す：関係者を訪問し、実際に話を聞いてみる

中間支援主体の支援

● 上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て

家畜排泄物法については知っているが、それをどう解決していくかの話し合いをする機会が作れず解決に向けての展開につながりにくい。

● 具体的な支援内容（打ち手）

- ・ 連絡網の整備
- ・ 共同堆肥舎を作りたい有志全員を個別訪問し、本音を引き出す
- ・ 共同堆肥舎を作るメンバーのチームビルディングを兼ねて、未来ビジョンWSを開催

● 打ち手による活動団体の変化（意識・行動・活動の進捗）

未来ビジョンWSを経て、将来像と地域課題の共有ができたことで、どう解決したらよいかを考えるようになり、具体的な案を出すようになった。

● 中間支援主体としての気づき・成長

一緒に行動する（膝を突き合わせ考えていく）ことの重要性を感じた。

活動団体の取組

● 活動名・時期

共通認識を持つ仲間を探す（6～9月）

● なぜそれを実施したのか（実施目的）

活動団体は6つの自治体にまたがり260名の組合員がいるものの、この事業は共同堆肥舎を作りたいという組合長が声掛けをした有志での取組となるため、同じ方向を向いているか確認が必要だった。また、資金や労働力も関わってくる活動のため、一人一人の本音を把握しておく必要があった。

● 実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか（活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗）

畜産農家の規模が小さいため、共同で取り組むことの重要性・メリットが分かったことにより、モチベーションの向上が見られる。

活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

体制を整える：ありたい未来と現状との差を把握する

中間支援主体の支援

● 上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て

共同堆肥舎ができさえすれば、解決すると思っている節があったが、そこが寧ろ堆肥作りのスタート地点となるものの、今まで適正処理の方法を学んだことがなく堆肥化する行動につながりにくい。

● 具体的な支援内容（打ち手）

堆肥化の勉強会を開催し、堆肥づくりを実践してもらうことにした

● 打ち手による活動団体の変化（意識・行動・活動の進捗）

堆肥づくりを実際やってみるという農家が出てきた。

● 中間支援主体としての気づき・成長

そもそも新規就農する農家には、法律のこと、堆肥の作り方などきちんと指導する必要があると思うので、沖縄県中部農業改良普及センターなどと連携していく。（センターは県の管轄のため、数年で異動してしまうことや、専門外で知識がない普及員もいることが課題）

8月の勉強会は支援側で準備したが、12月の勉強会は、活動団体が自主的に企画、運営をし40名の参加があったことから、堆肥化の重要性が地域に浸透してきた。

活動団体の取組

● 活動名・時期

堆肥勉強会（8月、12月）

※12月は活動団体のうるま支部が主催

● なぜそれを実施したのか（実施目的）

堆肥作りの重要性を示すこと、また、堆肥とはどういうものかを実際に作って理解する必要があった。

● 実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか（活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗）

堆肥作りの大変さを知り、共同堆肥舎の重要性を再認識することになった。

堆肥の勉強会を12月に主催し、40名の参加があった。
（中部地区和牛改良組合の事務局であるJAが開催した堆肥の勉強会には3名しか参加がなかったが、12月は組合の中で最大の160名が所属する支部であるうるま支部のみでの開催で40名参加）

活動・支援のプロセスの振り返り

- （特に前2スライドの支援を実施するにあたり、）今年度、力を入れて取り組んだ中間支援は？（中間支援機能チェックリスト.xlsxより上位3つを選んで記入）

協働がバナンスの項目	中間支援機能	項目（番号）	支援をしたタイミング等
参加の誘発	プロセス支援	1 (1)	6月～9月の意思確認や、11月～12月の個別訪問によるヒアリング
チェンジ・エージェント機能	プロセス支援機能	6 (3) ①, ②	11月未来ビジョンWS
チェンジ・エージェント機能	資源連結機能	7 (1)	8月勉強会, 2月地域円卓会議

● 共生圏づくりを進めるために、活動団体の能力をどう引き出せたか

家畜排泄物の不適切処理を解決したい思いが強いので、勉強会などを行うことで、畜産農家がすぐに行動（堆肥化）に移すことができた。

未来ビジョンWS, 地域円卓会議等の開催により、ありがたい未来像がイメージでき、同じ方向を向いていることができた。地域円卓会議での課題の深掘りもできた。

● 中間支援主体として向上したと思う中間支援機能

本学は、地域とともに豊かな未来社会をデザインし、地域貢献を行うことをミッションとしているが、我々が感じている以上に「大学」に対する地域住民の壁が高かった。自治体にとっても、大学は相談できる場所ではなかったが、本事業を通じて、地域に入って農家との連携をはかったことで、生の声を聞くことができ、課題を抽出しやすくなった。大学としての使命も果たしていると思っている。

● R6課題だと感じたこと

本音を引き出せているかどうかを見極めること

共同堆肥舎のための農事組合法人について、事業計画や数字の積み上げなどを提示していくこと。自分の農場から家畜排泄物がなくなればよいという話ではなく、出資金を出す以上は、どうやったら儲かるか、どういうルールでやっていくかなど、考えることは多い。

地域循環共生圏づくりに向けた次のアクション

- 地域循環共生圏づくりのために、どのような中間支援機能を発揮できるか、と考えているか。R7～中間支援主体として今後どのようなになりたいか。

中間支援主体としてできることは、地域住民への知の共有であると考えている。今年度は畜産農家対象に勉強会などを行ってきたが、次年度は耕種農家までひろげ、資源循環の重要性を一緒に考えていきたい。

自治体の巻き込み方の経験を活かし、市、県、国との連携を強化し、補助金・助成金などの申請のサポートを行っていく。

予算管理において、本学の規程に沿って執行する必要があるため、国立大学法人ということで、管理体制がしっかりしている。（本学規程が、経理マニュアルよりも厳しい部分があり、自由度が低いという欠点もある）

- 活動団体がアクションサイクルを回せるようにするための次年度の見立て・打ち手（具体的な支援策）

うるま市では、循環型農業を政策としてうちたてているので、農家と自治体をつなぐためのアクションとしても、目指すべき耕畜連携の基礎作りとしても、まずは、耕種農家側のリーダーとなる農家を探すことからはじめていきたい。

和牛改良組合メンバーと共に、ワークショップなどを開き交流できる場を作っていこうと考えている。

- 地方・全国事務局にサポートしてもらえると嬉しいこと

補助金メニューの案内と、書類の簡略化

事業のメ日（3/14）の1か月前には、参加必須のイベントを終了してほしい（精算が間に合わない）